

■新刊紹介

黄霊芝著／下岡友加編

『戦後台湾の日本語文学』

黄霊芝小説選2

戦後台湾で六十年以上にわたり日本語で創作を行ってきた黄霊芝（一九二八～）の作品集である。一冊目は二〇一二年に刊行されており、この二冊目には小説七編、童話四編と自選俳句百句が収められている。

目次

- 「はじめに」（下岡友加）
- 「竜宮翁戒貝」
- 「ふうちゃん」
- 「台湾玉賈伝」
- 「蛇」
- 「喫茶店「青い鳥」」
- 「花子」
- 「五郎の日記」
- 「名画」
- 「聖」
- 「男耕女織」

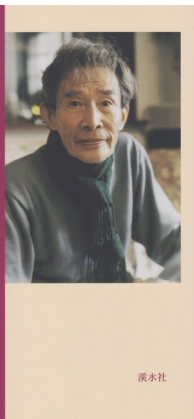
「ユートピア」

「俳句自選百句」

「解題」

私たちは安易に「日本語文学の可能性」などを語るべきではないだろう。下岡氏は著者黄霊芝の言葉を引きつつ「国境とはかわりなく、読者の心を動かす普遍性を黄は求めてきた」と述べ、そこにいかなる実が宿るかは自分の目で確かめよと読者に語りかけている。下岡氏の持続的な黄霊芝研究のエネルギーはこれからもたゆまず続くだろう。

関心のある方は『フェンスレス』第二号の下岡論もご覧いただきたい（オンライン版公開中）。



（二〇一五年六月 溪水社 二二一頁 定価
二〇〇〇円＋税）

■新刊紹介

田中英夫著 『損をしてでも良書を出す・ある出版人の生涯 洛陽堂河本亀之助小伝』

目次

- 一章 離郷
- 二章 印刷業
- 三章 洛陽堂草創期 一九〇九年～一九一二年
- 四章 俊三と千代田印刷所 一九一二年～一九一三年
- 五章 洛陽堂印刷所改称以後 一九一四年～一九一六年
- 六章 雑誌経営の転記 一九一七年～一九一八年
- 七章 亀之助経営の最後 一九一九年～一九二〇年
- 八章 歿後

大正時代の歴史や文化に関心のある人なら何度も目にしているはずの洛陽堂。この出版社がなければ大正時代の文化地

図はまったく別のものとなっていたはずである。にもかかわらずほとんど誰も河本亀之助を知らずにいた。大逆事件を生き延びた西川光二郎、山口孤剣に次いで著者三人目の評伝である。ここにも「大逆以後」の生を、その生涯の最後まで追い求める姿勢は貫かれている。著者は調査や執筆の進行状況を逐次手製の『洛陽堂雑記』（全32冊）にまとめ、配布されてきた。その徹底した調査も電話帳との格闘から始まったという。評伝の鬼に魅入られた者たちは幸いである。

（二〇一五年一月 燃焼社 六三八頁 定価 三二〇〇円＋税）



■新刊紹介

Alex Bates. The Culture of the Quake: The Great Kanto Earthquake and Taisho Japan. Ann Arbor, MI: The University of Michigan, 2015. (アレックス・ベイツ著『震災の文化 関東大震災と大正日本』)

目次

- 一章 震災文化
- 二章 震災後文学
- 三章 田山花袋、震災フラヌール
- 四章 震災メロドラマの中のスペクタクルな災害
- 五章 正宗白鳥「他人の災害」における静かな苦痛
- 六章 長田幹彦『大地は震ふ』における苦悩の生存者
- 七章 天譴およびその批評
- 八章 作家たちと朝鮮人騒ぎ
- 九章 大衆と大虐殺——責任と虐殺

結論

表象における朝鮮問題

「本書は大正時代の語りと虚構に関する最初の、そして最も重要な研究である。私小説作家からモダニストまで、プロレタリア作家たちから大衆小説作家まで、誰もが震災について何かを書いた。すべての主要なフィルムスタジオは震災映画を制作した。どのような場合でも、創作に対するそれまでの態度が、彼らが地震を描くときの方法として応用されていた。圧倒的な破壊と大きな苦難にもかかわらず、表現の中には独自の挑戦が形をとどめてもいた。どのようにすれば搾取／エクスプロイテーションなしで痛みを示すことができただろう？ 研究者たちは作家たちや映画監督たちのいくつかのグループを個別に注目してきた。しかし、彼らがそれぞれのように同じ主題に取り組んだかということに注目する研究はなかった。

関東大震災は、つい最近になって欧米

の研究者たちの関心を引きつけている代役的 (understudied) 出来事である。ハイ・カルチャーおよびロー・カルチャーのなかに表現された方法に注目することによって、《震災文化》は、人々が災害をどのように経験したか、そしてその後の数年の間、彼らはどのように災害を解釈したのかということについての洞察を与えてくれる。本書は日本およびアジアの文学・映画・文化・歴史の研究者たち、そして災害研究の研究者たちの興味を引くにちがいない。」(巻末紹介文より)

